

2010年(平成22年)9月28日(火曜日)

武好駅通の跡地発見

増毛山道の会が開削で確認

竹やぶに平らな地面

鉄製ボルトやトイレ跡も

【増毛】NPO法人増毛山道の会(伊達東会長)は二十五日、増毛山道の再現作業で木造建築に使う鉄製のボルト四本などを発見し、武好駅通(てい)の跡と確認した。同駅通は、昭和二十年代後半から使われなくなり、確認は朽ち果ててうっそうと茂る竹やぶに埋もれた状態だった。同会では「目撃証言などを集め、やっと探し当てる

会員

武好駅通の建設跡地から鉄製のボルトを掘り起こす増毛山道の会の



増毛山道は、増毛町別安政四年(一八五七年)から石狩市浜益間を結ぶニシン漁場間の連絡道路として江戸時代末期の

「増毛山道」の再現作業で、鉄製のボルトやトイレの跡を発見した。増毛山道の会、増毛町別安政四年(一八五七年)から石狩市浜益間を結ぶニシン漁場間の連絡道路として江戸時代末期の

に現在の価格で約一億円を投じて開削された。しかし、昭和二十五年に増毛港と雄冬港を結ぶ定期船が運行を始めたころから住民らが使用しなくなり、竹やぶに覆われるままになっていた。

この日の作業には、小杉忠利事務局長など九人が参加。午前七時に別荘地区に集合し、武好駅通を目指して登った。武好駅通が建っていたと考えられる跡地に到着した会員は、同九時五分から周辺の開削作業を開始した。

作業は一時間ほど終わり、竹やぶの中に平らな地面が現れ、周囲を注意深く調べると、トイレの跡やビール瓶、鉄製の鍋、茶わん、炭、駅通のすぐ横の電柱などが次々と見つかった。

駅通の広さは幅九尺、奥行き四・五尺で木造一部二階建て。当時の設計図を参考にしながらトイレの位置を基準に土台の跡を探すと建物の土台になる横柱をつなぎ合わせ

る鉄製のボルトを次々と発見。目印を置いて広さを確認した。増毛山道の会は今現在、別荘武好駅通と岩尾を結ぶ延長約十五キロの山道再現に取り組んでいる。小杉事務局長は「駅通が建っていた位置を確認できてほっとしている。九月末までには駅通と岩尾間を結ぶ山道の残り約一・三キロを開削したい」と声を弾ませた。